# 教えてセンセイ

山田雄司先生に聞く〈忍者の話〉

## 精神を鍛錬し、人間性や知力、体力を養い、実践するのが忍者なのです。

**山田雄司**さん

（やまだゆうじ）

1967年静岡県生まれ。京都大学文学部史学科卒業。亀岡市史編さん室を経て、筑波大学大学院博士課程歴史・人類学研究科史学専攻（日本文化研究学際カリキュラム）修了。博士（学術）。現在、三重大学人文学部教授。三重大学国際忍者研究センター（三重県伊賀市）副センター長。著書に『忍者とは何か』（中公新書）、『忍者の歴史』（角川選書）、『忍者はすごかった―忍術書81の謎を解く』（幻冬舎新書）他多数。


### 歴史的大事件！家康の大ピンチを救った伊賀・甲賀の忍者

忍者は黒装束を身にまとい、人間離れした技の持ち主として描かれるため、いつの時代も根強い人気です。はたしてどこまで真実なのか気になりますね。忍者という名称は昭和30年代に小説によって定着したもので、それまでは忍び、忍びの者と呼ばれていました。忍者の起源は神武天皇や聖徳太子の頃という説がありますが、裏付けに乏しく、はっきりわかっているのは、南北朝時代の軍記物語『太平記』に忍びが京都の石清水八幡宮に火をつけて敵を大混乱させたと記されています。

南北朝時代になると合戦のスタイルが大きく変わってきます。それ以前は「我こそは～」と名乗りを上げ、一対一で対戦していたのが、ゲリラ戦が主流になり、つけ火など相手の意表をつく戦法がとられ、影で働く忍者が重用されるようになりました。彼らがもっとも活躍したのは戦国時代で、他国を乗っ取るには兵糧や武器、城の構造、領内の道などさまざまな情報を知る必要があり、武田や上杉、今川といった戦国大名が地元の山賊やごろつきを雇い、忍者の仕事をさせました。

一方、伊賀・甲賀は大名の力が弱く、土豪などによる強固な自治組織が形成されていたので、人々は自分たちの身を守るために武力や忍術を身につけました。本能寺の変を知った家康が堺から本国の岡崎（愛知県）にたどり着いた「神君伊賀越え」は、道中を警護した伊賀・甲賀の功績です。家康の大ピンチを救ったのが伊賀忍者のルーツをもつ武将、服部半蔵正成と配下の忍びです。ちなみに服部半蔵は忍者ではなく、槍の名手でした。その後、家康は忍者を江戸に呼び寄せ、江戸城や市中の警備をやらせるのですが、家康公が伊賀・甲賀の者を召し抱えているということで、他の大名もこぞって雇ったため、「伊賀者」「甲賀者」が全国に広がっていきました。伊賀・甲賀の忍者は需要が高く、ある種ブランドだったのです。伊賀と甲賀は対立していたのかとよく聞かれますが、地続きのため姻戚関係が密で、むしろ良好な間柄でした。忍術対決としておもしろおかしく描かれますが、忍びの特徴や忍術に差はありません。

### 忍者は高い能力をもつオールマイティーな存在

忍者が呪文を唱えてドロンと消えたり、蝦蟇（がま）に変身するような忍術が江戸時代以降の歌舞伎や読本に登場しますが、それらは中国伝来の妖術と結びつき、「忍者ならこんなことをやったのかもしれない」という空想が加工されたものです。そもそも忍者には記録を残さない、他言しないという厳しい掟があるため、実態を知る史料が表に出ないのです。甲賀の忍者だった長野県松本の芥川家に残る文書には「忍びの修業は書物を読むこと。儒教や兵法、自然科学など幅広い分野の書物に親しみ、知識を得ることが大事である。そして暑さ、寒さ、昼夜を問わず、各地を歩くこと」と書かれています。人の生き方、戦い方だけでなく、医学、薬学、食物、天文、気象、記憶術や交際術にいたるまで、生きるためのサバイバル術を体得することが修業で、当時の忍術書は知恵の宝庫でもありました。

忍者というと身体能力ばかり注目されますが、むしろ高い知的能力が求められたのです。識字率が低かった時代に難解な書物を理解するわけですから相当なレベルだったと思います。ある軍学書にも「忍びに適しているのは知恵がある、記憶力がよい、コミュニケーション能力がすぐれていること。このすべてが揃わなければ忍びは成り立たない」と記されています。高所から飛び降りる、水中を潜る、忍び歩く方法などを書いた文献もありますが、どこまで忍者が訓練したのかは不明です。よく走っていたことは確かで、1日100㎞以上走ったといいます。木猿（きざる）と呼ばれた忍者は木にスルスル登り、枝から枝へ飛び移ることができたのでこの呼び名がつきました。特殊なトレーニングというより日々の鍛錬からそのような敏捷性が培われたのだろうと思います。

忍という字は「刃の下に心」と書き、これは心臓に刃物を突き付けられるような危機的な状況にあっても動じない、不動心をあらわしています。つまり、精神の鍛錬を大前提とし、人間性や知力、体力を養い、実践するのが忍者だったのです。

黒装束は18世紀初め、歌舞伎の舞台で役柄をわかりやすくするため、忍びを黒装束で登場させたことをきっかけに忍者のユニフォームになりましたが、実際は僧侶や芸人、商人などに扮して各地を回ったり、何年も前から移り住み、ムラ社会に溶け込むことをめざしました。怪しまれることのないよう、ひたすら凡庸な人物を演じるのです。忍びの歌についてまとめた『義盛百首（よしもりひゃくしゅ）』に「敵にもし　見つけられなば　足はやに　逃げてかへるぞ　盗人のかち」とあるように、戦闘を避け、生きて逃げ帰り、味方に情報を伝えることが最重要任務でした。

歴史の大きな事件において表には出ないものの、必ず何らかの忍者の働きがあったはずで、大きな役割を果たしていたと思います。誰にも功績を知られず、身分も低いままでは悔しいはず、と思うのは現代人の感覚で、彼らには「あの大きなことをやったのは私なんだ」という満足感があったことでしょう。忍術書のバイブルといわれる『万川集海（ばんせんしゅうかい）』に「忍びとは音を立てず、痕跡を残さない。名前を残さず、世間に誇ることもないが非常に大きな仕事を成し遂げる」と忍者の精神を説いています。

影のスーパー戦士として海外でも「NINJA」好きが多く、忍者の精神と体術を学ぶ忍術道場がにぎわっています。日本人の価値観として昔は忍ぶことは尊いものとされましたが、今は我慢せず、自己主張しようという風潮に変わっています。もちろん自己主張は大事ですが、自分と他人が必ずしも一致するわけではなく、少しずつ譲らなければ全体がうまくいきませんね。忍者をエンターテインメントとして大いに楽しんでいただきたいですが、忍ぶことの重要性を今一度、思い起こしてほしいものです。とくに家庭内は忍ばなければ平和にやっていけません（笑）。

写真上／「鎖鎌（くさりがま）」は分銅を敵の体に打ち付けたり、鎖で足を絡めとり、鎌で斬りつけるための武器。その上は両刃がのこぎりになっている「鋸（しころ）」。木の塀を切って忍び込むために使う。写真左／「撒菱（まきびし）」は侵入口に撒いたり、逃げるときに敵に投げつける忍具。

写真上／人気の観光施設「伊賀流忍者博物館」。どんでん返しや隠し階段しかけなどのからくりが随所にあり、外国人観光客にも大ウケ。黒装束の案内人が実演しながら解説する（写真右）。忍者の道具や資料も豊富に展示。

協力／一般財団法人 伊賀上野観光協会